

+

2021 年

クリスマスの主日礼拝説教要約

・ 12月19日：ヨハネ福音書 1：1-14.

「 命の言 」

・ 12月24日：ルカ福音書 2：8-20.

「 地に平和あれ 」

・ 12月26日：マタイ福音書 2：1-12.

「 異教徒の救い 」

説教《命の言》

ことば

鶏が先か、卵が先か、ではなく「初めに言があった」という至言は、聖書に出てくる最も優れた思想の一つとして、人類の叡智の中に組み込まれました。

キリスト教徒なら、その言が肉となりナザレのイエスが出現したことを認識しています。この言は、ロゴス(λόγος)という古代のギリシャ語で、理性とも訳されますが、中国語の聖書では、「道」という字を当て嵌めます。聖書の本文は、このロゴスという概念を、さらに、探求することはありませんが、それが、イエス・キリストの本性であることを教えています。モーセの時代に父なる神が直接、戒めを石板に刻んだことはありましたが、言が人となったという前例はありません。神はその石板にはない、肉の心を持つ人の子として世に現われたのでした。

しかし、一体誰がそのような神の神秘を知ることになったのでしょうか？伝説では、その人の名はヨハネ。因にお兄さんの名はヤコブ。お父さんの名はゼベダイと申します。親子でガリラヤ湖の漁師をしておりました。もうそれだけで、この福音書の著者が漁師の息子であるというのは、ただの伝説であるとの扱いを受けてしまいます。そんなヨハネにロゴスの神学など書けるはずがないと。

ただ、何らかの理由で大エヨセフのことを知り得たと想われるマタイや、イエスの母マリアに親近感を覚えていたルカとは違い、漁師のヨハネが神の真理に直接接触れる位置にいたことを、頭から否定できる人などいません。なぜなら、それも、紛れもない神の賜物だからです。

初めからモノが存在したのではなく、初めに何も無いところに言があったという思想は此の上なく潔い叡智なのです。

同じヨハネ福音書の後半の17章の23節以下には、天地創造よりも前に、父なる神とキリストが愛によって結ばれていたという事実が語られます。これは、初めに言があり、言が父なる神と共にあった時の両者の関係が、より具体的に語られている場面です。イエスは、その愛の力がご自身の名を信じる人々にも及ぶことを約束しています。永遠の命を得させるために(ヨハ福音書3:16)。

このようにヨハネ福音書にはイエスの生誕の描写はないものの、神が人となるまでの長い時間(αἰών)における天の計画と成就に、焦点をあてているところがおもしろいのです。

説教《地には平和あれ》

第二次世界大戦後、世界中で多発してきた紛争を何とか押さえ込んで21世紀を迎えた人類は、今また大戦後最大の危機に瀕しています。日米韓の軍事演習のみならず、NATOの軍が東欧や日本近海に至るまで展開する大変な事態となっています。話し合いで鎮静化をはかれると信じる人もいれば、交戦やむなしと腹を括る政治学者までいて気が気ではありません。

ユダヤの知識人の中にはこの2000年間、世界平和が実現していないのは、メシアが今もって出現していない明白な証拠であると言う人もいます。

他ならぬキリスト教徒が無限大の武器を所有し、最強軍団を自負する限り、神の独り子の意志は、この地上ではどこまでも制限され続けることになるでしょう。

加えて、先が見えないコロナのパンデミックです。「神も御照覧あれ」と人間がどこまで言い切れるのか。人類の身から出た錆を、神がどこまで背負っていてくださるのか？この深刻な事態と、誰もが向き合う時が来ているのかもしれませんが。

クリスマス休戦さらなるオリンピック休戦、これらの機会を人類は神からの賜物として最大限に活用しなければなりません。

神の独り子は来られました、平和を実現するために。そして神の独り子は葬られました、平和を拒絶する人類の手で。けれども、神は自らが消滅する道を選ぶことはありませんでした。では人類は、何を選びとろうとしているのでしょうか？世を愛された神の前で。

この切実な問いに、神から返答能力(responsibility)を備えられた被造物は答えなければなりません、神に対する人類の責任として。一方神の存在を度外視し続ける為政者や責任者の無責任な言動は、どこまでも放置されたままです。

人類は平和を選びとる以外に道はありません。神が、その独り子を賜ったほどに世を愛されていることは明白であるはずで、被造物にはその愛に応える以外に選ぶべき正しい道は無いのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」

説教《異教徒の救い》

旧約聖書でもイサクの子のヨセフは、夢の啓示によって神の御旨に従いました。新約聖書の最初に出てくるナザレの大工のヨセフも、やはり同様に、夢の中で神の啓示を受け取ります。最初は許婚の乙女マリアの懐妊、さらに出産後の避難命令、帰還命令と、三人家族の命運は大工ヨセフの見た夢の中の啓示に左右され、彼らの危機は回避されました。

さて、ヨセフの一家がエジプトに避難する前に起きたことこそ神の独り子イエスの誕生です。両親だけが知り得た秘密の子の誕生かと想われましたが、そこに遠く離れた東の国から未知の来訪者らが加わるという予想外の展開となります。彼らは、遠くで夜空に輝く特別の星を見つけ出して、その星の下の生まれたばかりのユダヤの王に謁見するのが訪問の目的でした。それが実現して、彼らは歡喜に満たされます。彼らの正体は異邦人で異教徒、おそらくはゾロアスター教の司祭を兼ねた博士たちです。聖書は基本的には異教を排除する立場です。ただ、アブラハムがサレムの王で祭司のメルキゼデクから祝福を受けたように、イエスも東方の祭司兼博士らの祝福を受けることになるのです。どちらも特殊な事例です。と同時に、なぜかこれらの異教徒の宗教は否定の対象にはなりません。メルキゼデクの「いと高き神(創世記14:18)」の宗教の実体は今となっては不明(先住民のエブス人の神?)ですが、博士らのゾロアスター教は21世紀の今日でも細々と受け継がれています。

ただし、ドイツのケルン大聖堂に眠る2000年前の東方の博士らの遺骸は靈柩の芸術性はともかく、中身は100%偽物です。

いずれにしても、アブラハムもイエスも異教の世界の人々からの祝福を受けたという共通点を持っています。

さて、その博士らは、ベツレヘムのイエスの許を訪れる前に、エルサレムに君臨していたアラブ人のヘロデ大王に挨拶を済ませていたから、さあ大変！すでに大王は、乳児の王を見つけだし、殺害するという良からぬ計略を立てていたのです。ミカ書5章1節から、その王の誕生地を博士らに伝えたのは大王であり、その見返りにベツレヘム訪問の結果報告を彼らに命じていたのです。異教の博士たちに、大王の計略を暴露したのは夜の夢の中で示された啓示でした。それは大王との再会の危険性を知らしめるもので、彼らとイエスの命を守るためのものでした。博士らは来た道とは別の道を通して、東の国へと帰還を果たしました。